

A-7					
主題	住み慣れた地域で最期まで				
副題	ショートステイサービスにおけるターミナルケアについて				
キーワード 1	ターミナルケア	キーワード 2	ショートステイ	研究(実践)期間	20日
法人名・事業所名	社福) 賛育会 特別養護老人ホームマイホーム新川				
発表者(職種)	畠山順子(看護主任)、唐澤淳(看護師)				
共同研究(実践)者	なし				
電 話	03-3552-5670	F A X	03-3552-5636		
事業所紹介	<p>マイホーム新川は、中央区の従来型特別養護老人ホームとして定員80名ショートステイ8名で2006年4月に開設されました。</p> <p>都会でありながらゆったりと流れる墨田川のほとり、住み慣れた街で安心して暮らせる「わたしの家」を目指しています。</p>				
<p>《1. 研究(実践)前の状況と課題》</p> <p>超高齢化が加速する中、特別養護老人ホームには地域の「多死社会」を支える大きな役割があると認識し、施設での看取り体制を整備・強化し合議と同意でご入所者のターミナルケアを積み重ねてきた。その結果、ひとつとして同じ看取りはないものの、穏やかな最期を迎えるために必要なことは、死を考え受け入れるための時間が大切な要素であると考え。</p> <p>新型コロナウイルスの蔓延により面会や外出の制限が現在も続いている。直接会えない中でターミナル期にあることを理解いただくには難しい状況にあるが、ご本人・ご家族の希望に沿った最期を迎えることができるように、選択肢の一つとして施設で看取りが可能であることを提示している。</p> <p>そんな中、2017年からショートステイをご利用中の方が在宅のかかりつけ医からターミナル期にあると判断された。ご家族は医療を望まず看取りの意思は明確であったが、ご自身も高齢であるため亡くなるまでショートステイ利用のご希望があった。看取り前提のショートステイ受入れは初めてのことで職員に戸惑いや不安もあったが、これが地域から求められているのだと考え、在宅のショートステイご利用者の看取りを実践することとなった。</p> <p>《2. 研究(実践)の目的ならびに仮説》</p> <p>かかりつけ医が入所前に嚥下評価を実施。常に誤嚥しているような状態であるため経口摂取は無理をしないことをご家族含め職員も情報共有できている。何よりもご本人の安楽を最優先すれば、ご本人・ご家族の気持ちに寄り添い穏やかな最期を迎えることができると考える。</p>					

### 《3. 具体的な取り組みの内容》

ご利用者：IT 様 92歳女性 3/22～4/7 ショートステイ予定 今回70回目のご利用

- ご家族からの意向を受けかかりつけ医から現在の状況を確認、酸素吸入2L 継続中。内服は中止で高血圧の貼付薬のみ。心肺停止時の対応について情報共有する。
- 直前まで点滴が入っていたためか表情良く会話も可能。徐々に水分も入らなくなり口腔ケアと整容に努める。吸引等必要最低限の医療的ケアとしご本人の苦痛の緩和に努める。
- ご家族と初めはオンライン面会であったが、経口から水分が入らなくなった時から十分な感染対応のもと、1日1回10分程度の短時間面会を可とする。
- 呼吸が荒いようだと言心配するご家族に、体が死を受け入れる準備をしているためにご本人の表情をみて苦痛がないことを伝える。最期に着替える浴衣を持参いただく。
- 4/2 ご逝去、かかりつけ医が死亡診断書作成する。診断名「老衰」。

### 《4. 取り組みの結果》

短時間でも直接会って話が出来たこと、徐々に変化していく様を見る中で死へのプロセスをご家族が受け入れられ、ご本人ともに大変穏やかな表情を見ることができた。利用いただいていた併設の訪問介護・デイサービス職員らも、自ら希望して十分な感染対応をして面会に来てくれた。最期のお見送りにはかつてないほどの職員が集まり、ご家族からも丁寧な感謝のお言葉をいただくことができた。

### 《5. 考察、まとめ》

人がいかに死ぬかということは、残される家族の記憶の中にとどまる。看取りとはご本人だけでなくご家族を含めたターミナルケアの総称でなければならない。今回在宅のままショートステイ中でのターミナルケアを経験した。一人の人が住み慣れた自宅で生活し続けるために大勢の各職種が関わっていたことを改めて実感した。そしてそれが穏やかな最期につながったことは多死社会を考える中で、大きなヒントになると考える。

### 《6. 倫理的配慮に関する事項》

なお、本研究(実践)発表を行うにあたり、ご本人(ご家族)に口頭にて確認をし、本発表以外では使用しないこと、それにより不利益を被ることはないことを説明し、回答をもって同意を得たこととした。

### 《7. 参考文献》

- 「平穏死」のすすめ 石飛幸三
- 老衰死 大切な身内の穏やかな最期のために NHK スペシャル取材班

### 《8. 提案と発信》

どう生きてどう死んでくかに正解はない。しかしながら最期の場所として選ばれる施設でありたいと強く思う。